様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３０１７０

研究課題名（和文）戦後日本の知的交流とアメリカのフィランソロピー―――松本重治とロックフェラー財団

研究課題名（英文）Japan's Postwar Intellectual Interchange and U.S. Philanthropy: Matsumoto Shigeharu and the Rockefeller Foundation

研究代表者
中嶋　啓雄（NAKAJIMA, Hiroo）

大阪大学・国際公共政策研究科・准教授

研究者番号：３０２９４１６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　戦後日本において、国際文化会館（東京・六本木）を主な舞台に知的交流を牽引した元ジャーナリスト・松本重治と彼の活動を支援したロックフェラー財団との関係を明らかにした。
　具体的には冷戦下、同財団がアメリカ政府と密接な関係を築くなかで、松本が関わった知的交流事業が、アメリカの広報外交（パブリック・ディプロマシー）との緊張関係を維持しつつ、1960年代にかけてどのように展開していったのかを詳らかに解明した。

研究成果の概要（英文）：The project shed light upon the relationship between Matsumoto Shigeharu, a former journalist who led Japan's postwar intellectual interchange at the International House of Japan, and the Rockefeller Foundation that supported his activities.
The project revealed how Matsumoto's intellectual interchange programs unfolded in the 1950s and 1960s in strained relation to U.S. public diplomacy as the foundation built intimate relationship with the U.S. government in the Cold War.

研究分野：社会科学

キーワード：政治学

１．研究開始当初の背景

国内外で松本重治や彼の知的交流活動を支援したアメリカのフィランソロピーに関する研究が次々と発表されていた。日米関係の文化的側面を論じた Tadashi Yamamoto, Akira Iriye and Makoto Iokibe, eds, *Philanthropy and Reconciliation: Rebuilding Postwar U.S.-Japan Relations* (Tokyo: Japan Center for International Exchange, 2006)（日本語版：山本正編『戦後日米関係とフィランソロピー』ミネルヴァ書房、2008 年）や Takeshi Matsuda, *Soft Power and Its Perils: U.S. Cultural Policy in Early Postwar Japan and Permanent Dependency* (Washington, D.C.: Woodrow Wilson Center Press, 2007)（日本語版：松田武『戦後日本におけるアメリカのソフト・パワー―――半永久的依存の起源』岩波書店、2008 年）は、共に戦後の知的交流支援といったロックフェラー財団などの対日フィランソロピー活動、換言すれば戦後アメリカのソフト・パワーを論じた優れた研究である。また、ジャーナリスト・開米潤による評伝『松本重治伝―――最後のリベラリスト』（藤原書店、2009 年）が刊行され、松本とジョン・Ｄ・ロックフェラー3 世――1929 年、太平洋問題調査会（ＩＰＲ）の京都会議で出会い、戦後、生涯の友になった――の交友と活動に焦点を当てた、ニューヨーク在住の映画監督・早崎宏治のドキュメンタリー*The Quiet Builders: John and Shige* (Cinemic、2011) も制作されていた。

そうしたなかで本研究では、ロックフェラー財団に支援された松本の知的交流活動を、東西冷戦の影響を受けながらもそれを超えてグローバルな市民社会に貢献したものと捉えて、一次史料に基づき検証しようと考えた。松本が自らの著作で語っているように、彼は冷戦に規定された日米関係に限定されない知的交流を構想しており、元来、ロックフェラー財団も政治と一歩距離を置いていたところにその特色があったと推測されるからである。国際文化会館の未公刊史料が公開されていないため、日本で利用できる一次史料は少なかったが、従来、必ずしも網羅的に活用されてこなかったロックフェラー・アーカイブ・センター（ニューヨーク州スリーピーホロー）の史料を渉猟することによって、ロックフェラー財団に支援された松本の知的交流活動をいわば「グローバルな市民社会への序曲」として描き出すことを試みようとしたのである。

研究代表者は数年来、20 世紀前半のアメリカ政治・アメリカ史の碩学チャールズ・Ａ・ビアード（1874～1948 年）と知米派知識人の交友、特にその日米関係へのインプリケーションについて研究を行なってきた。そして、戦前から戦後初期にかけてのビアードの「文化国際主義」（入江昭）や、彼と政治家・文筆家の鶴見祐輔（1885～1973 年）――戦後、活躍した鶴見和子（社会学）・俊輔（哲学）姉弟の父――、日本のアメリカ研究の祖・高木八尺（1889～1984 年）、高木の教え子であった松本（1899～1989 年）らとの交友について、日英両語で研究を発表してきた。本研究ではそのような戦前から戦後初期にかけての日米文化関係の考察を発展させて、ロックフェラー財団に支援された戦後の松本の知的交流活動について、検討することを構想したのである。

２．研究の目的

時代的には、松本とロックフェラー財団が日米間の知的交流の最前線にいた 1950～60 年代に焦点を当てた。そしてその時代、彼らの活動やその意図がどのようなもので、それが戦後日本の学界や論壇に影響を与えつつ日米関係、さらには 1970 年代以降、顕在化するグローバルな市民社会（Niall Ferguson et al., eds, *The Shock of the Global: The 1970s in Perspective*, Harvard University Press, 2010 参照）にどのようなインプリケーションを持ったのかを明らかにすることを最終的な目標とした。

1950 年代、アメリカ研究者・斎藤真や外交史家・細谷千博はロックフェラー財団の助成を得てアメリカに留学して（それぞれ 1951～53 年、1955～57 年）、戦後第一世代の社会科学者として、日本のアメリカ研究や国際関係論（国際政治学）を牽引していった。1960 年代前半には、国際政治学者・武者小路公秀もロックフェラー財団の助成を得て、アメリカに留学（1961～63 年）している。1964 年には、松本の尽力で国際文化会館がジョージ・Ｆ・ケナンを招聘した。京都における講演では国際政治学者・高坂正堯、東京での講演では細谷が通訳を務めた（ジョージ・ケナン〔松本重治編訳〕『アメリカ外交の基本問題』岩波書店、1965 年）。高坂はそうしたなかでケナンと親しく語り合い、それは彼の最初の単著『国際政治』（中公新書、1966 年）にも反映されている。

また、1960 年代には、国際文化会館が関わる「日米民間人会議」が 3 回にわたり開催された。特に第 3 回目のウィリアムズバーグ会議は、ロックフェラー3 世が創設したアジア・ソサエティーと国際文化会館が共催したもので、また、ウィリアムズバーグはロックフェラー3 世の父、ジョン・Ｄ・ロックフェラー2 世の財政的支援で 20 世紀前半、再建された植民地時代のヴァージニアの古都であった。一連の「日米民間人会議」にはエドウィン・Ｏ・ライシャワー、ロバート・スカラピーノ、デイヴィッド・リースマン（1961 年、国際文化会館の招聘で来日）、ダニエル・ベル、スタンレー・ホフマンらアメリカの代表的なアジア研究者や社会科学者が出席した。日本側は松本の他、評論家・加藤周一、京都学派の桑原武夫らに加えて、新進気鋭の坂本義和や永井陽之助、蠟山道雄（当時、国

際文化会館スタッフ）らが出席していた。

このように 1960 年代までの松本重治の知的交流活動は、坂本、永井、高坂、蠟山ら戦後日本を代表する国際政治学者にアメリカの第一線の学者と議論する機会を与え、彼らの一部はそうした経験を踏まえて、1960 年代後半から 1970 年代初めにかけて、沖縄返還等、日米外交の重要局面に関与した。さらにロックフェラー財団に支援された松本の知的交流活動は、東西冷戦や日米関係の文脈を超えて国際的に議論できる、換言すればグローバルな市民社会に貢献する学者の育成に寄与したと推測される。

そうしたなかで、ロックフェラー財団に支援された松本の知的交流活動が日本社会、さらには顕在化しつつあったグローバルな市民社会にどのようにインプリケーションを持ったのか、その内実――松本の知的交流の理念やロックフェラー3 世が理事長として先導したロックフェラー財団の対日プロジェクトの意図とそれらの影響――を一次史料に基づき明らかにすることを目的としたのである。

３．研究の方法

関連の学術書やアメリカの定期刊行物を収集し、また日本国際政治学会、アメリカ学会といった国内の学会にも積極的に参加して、当該分野の研究動向の把握に努めた。さらに学会や研究会において報告を行なって、そこからのフィードバックを研究に生かしていった。

史料については、ロックフェラー・アーカイブ・センター所蔵の松本重治－ジョン・Ｄ・ロックフェラー3 世往復書簡、国際文化会館関連文書、ロックフェラー3 世日記、さらにはロックフェラー財団の対日プロジェクト関連文書を活用して、また、それらと東京大学総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター図書室の高木八尺文庫や、外務省文書（「国際文化会館」『本邦における協会及び文化団体関係雑件』）といった国内の史料を照合することで考察を深めていった。さらにアメリカの国立公文書館Ⅱ（メリーランド州カレッジパーク）において、1950 年代から 1960 年代前半にかけてのアメリカの対日文化外交に関する史料を渉猟した。

上記の学会・研究会への出席やそうした場での研究報告、アメリカでの史料収集に基づいて、論文（邦語・英語双方）や共著を執筆していった。

４．研究成果

ニューヨーク近郊のロックフェラー・アーカイブ・センターを訪問して、松本と戦後、ロックフェラー財団の理事長を務めることになったジョン・Ｄ・ロックフェラー三世との間の往復書簡（1950 年代初めから 1960 年代初めまで。それ以降は未公開）、1960 年代初めまでロックフェラー財団人文科学部長を務めて、日本に対する助成において中心的役割を果たした日本近代政治史の専門家チャールズ・Ｂ・ファーズの日記、また同財団の対日プロジェクトに関わる史料を収集（複写、デジタルカメラによる撮影）・閲読した。

国内においても松本の知的交流活動の端緒となった、ロックフェラー3 世が文化問題顧問として参加したダレス講和使節団に関わるアメリカ合衆国外交文書（マイクロフィルム）や、外務省管轄下の財団法人としての国際文化会館の活動に関する日本外交文書（外務省外交史料館所蔵）を収集（複写）・閲読した。松本と共に国際文化会館の創設・運営に尽力した彼の恩師・高木に関わる文書が所蔵されている高木八尺文庫（東京大学総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター図書室）の関連資料（デジタルファイル）も収集・閲読した。

さらに最終年度にはワシントン郊外の国立公文書館Ⅱを訪問して、アメリカの対日文化外交に関する史料を収集した結果、アメリカ政府の日米知的交流に対する姿勢も詳らかに検討することが可能となった。

こうした作業と並行して、日本国際政治学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会、関西アメリカ史研究会、国際関係史学会（Commission of History of International Relations〔ＣＨＩＲ〕）研究会の年次大会や例会に出席して、関連のセッションでは質疑にも加わり、学界における本研究の位置づけを確認した。アメリカ学会年次大会の部会、関西アメリカ史研究会、国際関係史学会の研究会においては、研究報告の機会を与えられ、討論者のコメントやフロアとの質疑応答で得たものも大きかった。

具体的な成果としてはまず、高木とビアード――1920 年代のアメリカ留学中に出会って以来、松本が生涯、師と崇めた――とその妻メアリーとの太平洋戦争をはさんだ交友を考察した英文論文を執筆して、学会誌に掲載された。同論文に関して言えば、1920 年代前半、ビアード夫妻が訪日した際にもロックフェラー財団は資金援助しており、同財団による日米間の知的交流への戦前からの寄与の事例としても重要である。同時に自身の東アジア体験――高木、松本らとの交友はその根幹の一部を成す――を踏まえた、ビアードのアメリカ帝国論についての論考も執筆して、書籍の一つの章（共著）として発表した。加えて、リベラル派とはいえ、戦前、アジア・モンロー主義的主張を擁護した松本、高木らの構想が、戦後、どのような国際秩序構想に結実していったのかに触れた論文も学会誌に掲載された。

さらに海外の学術雑誌への投稿を前提に、国際文化会館を主な舞台とした松本の知的交流事業とロックフェラー財団との関係を東西冷戦の推移との関連で論じた英文論文を執筆した。

このように数年来の史料収集や研究報告、

論文・共著の発表が一つの成果に結実しつつあり、ロックフェラー財団に代表されるアメリカのいわゆる巨大財団（big foundation）とアメリカ外交の接点を探る、近年、内外で関心の高いアメリカ外交や日米関係の文化的側面の研究として、今後、さらに考察を深めていくつもりである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 中嶋啓雄、モンロー・ドクトリン、アジア・モンロー主義と日米の国際秩序観―戦前・戦中期における日本のモンロー・ドクトリン論を手掛かりに、アメリカ研究、査読無、49 号、2015、61－80
http://www.jaas.gr.jp/journal.html

② Hiroo Nakajima, Beyond War: The Relationship between Takagi Yasaka and Charles and Mary Beard, Japanese Journal of American Studies, 査読有，no．24，2013，125-144．
http://www.jaas.gr.jp/journal-e.html

〔学会発表〕（計３件）

① 中嶋啓雄、戦後日本の知的交流の再生―アメリカ研究者とロックフェラー財団、2014 年アメリカ学会年次大会（部会Ｄ「既存システムの限界と専門知の活用」）、2014 年 6 月 8 日、沖縄コンベンションセンター

② 中嶋啓雄、戦後日本の知的交流とロックフェラー財団―松本重治とジョン・Ｄ・ロックフェラー3 世の関係を中心に、国際関係史学会〔ＣＨＩＲ〕研究会、2014 年 3 月 1 日、東京外国語大学本郷サテライト

③ 中嶋啓雄、戦後日本の知的交流とアメリカのフィランソロピー―松本重治とロックフェラー財団、関西アメリカ史研究会第 245 回例会、2014 年 1 月 26 日、キャンパスプラザ京都

〔図書〕（計１件）

① 中嶋啓雄、大阪大学出版会、秋田茂・桃木至郎編『グローバル・ヒストリーと帝国』、2013 年、268－296（9 章　チャールズ・Ａ・ビアードの反「帝国」論再考―東アジア体験との関連を中心に）

６．研究組織
(1)研究代表者
中嶋　啓雄（NAKAJIMA Hiroo）
大阪大学・大学院国際公共政策研究科・准教授
研究者番号：30294169